

帰国後の社会還元

白井 宏明（JICA 地球ひろば 企画グループ 社会還元・ボランティアチーム）

松元 隆 （JICA 地球ひろば 企画グループ 社会還元・ボランティアチーム）

長谷川 雅之（青年海外協力協会（JOCA）事業部事業二課

地球生活体験学習プロジェクトチーム）

(本日、こちらに書いてあります帰国後の社会還元ということでございます。

発表資料のレジュメ

地球体験プログラムのパンフレット この二つになります。)

帰国後の社会還元ということです。皆さんこれから青年海外協力隊の訓練生を経て協力隊員になれるということなんですけれども、この制度は二つの目的がありまして、皆様の現職教員としての知見を途上国の教育現場に還元していただくこと、これが一つの目的、その後の目的というのが実は長くかつ大事なことなのですが、今度は途上国で得た経験を日本の学校に還元していただくこと、この二つの目的がこの制度にはあるんじゃないかと思っております。今はこれから行く国のことで頭がいっぱいじゃないかと思うんですけれどもその後 24 ヶ月後、2 年後の 4 月、平成 21 年、2009 年の 4 月には再び日本のそれぞれの地域の学校に戻られるということになってその 2 年後にどんなことをしたらいいのかということをイメージを持ってもらうためにこれからの講座を行います。今日の講座のねらいということで申し上げたことは目的の二番目のところに当たります。帰国後の日本の学校での活動は世界の学校に居る時からすでに始まっているということを理解する、理解していただくことですね、これが大事なことです。もう一つ、一番目、JICA の定義する開発教育、開発教育について後で説明しますが、開発教育について理解していただきたいということこれが今日の講座の一番目の目的です。三番目で、開発教育で導入されている参加型ワークショップ手法ということについて実際に体験し理解いただくということを目的とする、今日はこの三つの目的をこれから進めていこうと思います。【白井宏明】

皆さん、こんにちは青年海外協力協会、通称 JOCA の長谷川といいます。この JOCA というのは OB・OG のみで組織されている団体なんですけれどももしかする今後ちよくちよくお会いするかもしれません。皆さんももしかすると名前を聞くことがあるかもしれません。またその時はよろしくお願いします。早速なんですけれどもアイスブレイクとして今から 10 分くらいでお話したいんですが、現職参加の皆様の手元には 4 つ切りの紙で教師になる前と今の自分という紙が一枚有るとおもいます。ちょっと聞いてみましょうか。教師になって 5 年未満の方はどれくらいいらっしゃいますか。3 分の 1、4 分の 1 くらいですね。では 10 年以上の方はいらっしゃいますか。3 分の 1 くらいいらっしゃいますね。皆さんが教員になったばかりのころを思い出していただきたいんですけれども、教員になる前の自分と今の自分、考え方・習慣・態度、変わったことってありませんか。2 分くらい時間を取りたいと思います。ちょっと昔の自分と今の自分、思い出しながら、比べながら、書き出してみてください。・・・はい、よろしいでしょうか。書かれているところまで一度聞いてみたいんですが、誰か・・・紹介してもらえますか。(私は教員になる前は人前で話をする時のポイントが分かっていなくて、時間を効率的に使っていなかった。歌があまり上手じゃなかったんですが、今は人前で話す時にことばに気をつけるようになった。時間が上手に使

えるようになった。歌を歌うのが楽しくなってきたということがありました。以上です。) ありがとうございます。皆様から拍手が来るのもありがたいですね。歌がうまくなるっていいですね。おそらく子どもたちと一緒にいろんな歌を歌っているんでしょうね。つぎはですね、せっかくなので、自己紹介を兼ねてもらってかまいません。皆様の両隣、あるいは前後にいらっしゃる同じ現職の先生の変わったこと、あるいは自分の変わったことというのをちょっと時間を取って共有したいと思います。ざっくばらんでかまいませんので、お近くをお探しいただいて 4 分くらい時間を取りたいと思います。共有してください。……はい、ありがとうございます。どうですか、いろんな驚きがありませんでしたか。えっと思うこととか、なるほど私もそうかもしれないと思うこと、場所が変わったり時間軸が変わったりすると人って変わっていきますよね。おそらくこれから皆さんが任国に行って帰ってくる 2 年後というのを想像してもおそらく皆さん変わっていると思います。考え方もかもしれません、行動かもしれません、態度かもしれない、学んだことをもしかすると現場の子どもたちに伝えたいと思うものがあるかもしれません。これはちょっと変わったという話はそう思った時に役に立つ情報、あるいは使えるものというのを今日今から時間にして 1 時間くらいの中で話していきたいなと思っています。【長谷川雅之】

(今から白井が話します) 今から開発教育ということばと国際理解教育という言葉について確認をしたいと思います。開発教育ということばをこの講座に来るまで聞いたことがなかった人、……、15 人くらいでしょうか。国際理解教育ということばを聞いたことがない人、……、さすがにいらっしゃるですね。ではもう一つ質問します。3 月までに国際理解教育を担当したことがある人、……、12~3 人というところでしょうか。開発教育と国際理解教育の同じところと違うところを確認しておきたいと思います。JICA が独自に定義した開発教育はありませんが、ODA 政府機関で使われているものを我々は準用させてもらっています。「開発教育とは貧困・飢餓・環境破壊など国際社会・地域社会の現状を知り、開発・環境・人権・平和をはじめ様々な問題の理解を深め、国際協力・開発援助の重要性の認識を深めるための教育、また開発途上国と先進国との関係を含め国際社会の問題の解決に向け、何らかの形で参加する態度や能力を養うことを目的とした教育」、こちらは「21 世紀に向けて ODA 開発懇談会報告書」に出ています。ということでフォーマルな定義も持っているということをおさえておいてもらいたいと思います。ではなぜ JICA が開発教育ということばを使うようになっているかということをお願いしたいと思います。このことばはもともと援助、途上国の開発の現場から生まれたことばなんです。草の根や NGO の活動の中から生まれた概念で、いろんな NGO とか欧米を中心に途上国援助を長くしている間にいろんなキャンペーンをしないとチャリティでお金を支援してくれる市民に伝わらないということから広報・キャンペーンが始まったんですね。その後単なるキャンペーンだけでなく、先進国と途上国といわれる地域の関係性とかそういったところへの理解が先進国の市民の中で深まっていき、開発教育、開発に関する教育ということで概念が生まれてきたと

ということでございます。一方国際理解教育、皆さんが日常の業務用語としてお使いになる国際理解教育なんですけれども、英語で **International Understanding Education**、これは二つの名前があるんじゃないかと私考えています。一つはユネスコ、1974 年の勧告ということで「国際理解、国際協力、および国際平和のための教育ならびに人権および基本的自由についての教育に関する勧告」を見ると、取り扱うべき人類の主要課題として、民族・平和・軍縮・人権・人種差別・開発・人口・環境などの問題を提起しています。一方日本で実際に教育現場にいらっしゃる皆さんがどういうふうな国際理解教育についてどう定義しているかということについて微妙な感覚としてわからないところもあるんですが、知識として知っている限りではここに書いているような中教審の答申、「国際社会に生きる日本人の育成を軸とし、主として日本の伝統文化への理解と尊重、異文化理解、外国語のコミュニケーション能力の育成を目指す」というようなことがあるのかなと思います。結論めいていうと、全ての概念が必ずしも重なっているとは思わない。ただし似た領域があり、開発教育にしても、国際理解教育にしても、途上国と日本との関係そういったところで世界の問題について私たち、大人と子どもがどういった態度をとったらいいかということの学習ではないか。ということで **JICA** としては、開発教育と国際理解教育の二つは重なる領域が非常に多いということで、援助の現場に近いために、開発教育と使っているんですが、同時に日本の学校現場では国際理解教育ということばが使われているということも承知していますので、二つの用語を併用しながら実際の業務にあたっています。これから皆さんが途上国へ行かれると開発教育ということばをよく聞かれるんじゃないかと思います。それで日本に戻ると国際理解教育ということばしか普段聞かないのであれっと思うかもしれませんが、重なっている部分が多いということで理解していただければと思います。

私たちは皆さんの 24 ヶ月後を考えていただくために講座を行います、ここで強調したいのが現地にいる間から帰国後にどのようなことができるか、その準備とか心構えをしていただければなあということをお話したいと思います。現地で帰国後のことを意識しながら活動するという人もいらっしゃることを紹介したいと思います。いくつかの在外事務所では試験的に開発教育を業務の中に取り入れているところもあります。ニジェール、マレーシアなどです。これから行くニジェールの子どもたちに何を教えるかなどというときに日本の事例を応用することもあると思いますが、同時に帰国後にはニジェール、マレーシアで得た資料をどうやって活用するかということをイメージしてもらえればと思います。そのための参考のビデオを後ほど見てもらいます。【白井宏明】

皆さんこんにちは、松本と申します。私は **JICA** の開発部教育事業部を担当しているんですが、もう少し詳しいことを紹介します。まず **JICA** のスタンスについて、開発教育の担い手は直接的には **JICA** が全てやっているということではなく、日本の先生方が基本的なメンバー、それから開発教育を活動目的としている **NGO**・市民団体など様々有り、その活動も多様です。こうした開発教育の担い手の中で **JICA** としても学校等の継続的な教育現場を持っ

ていないということもあり、JICA のスタンスとしては開発教育を側面から支援する事業ということに重点を持っています。皆様方をはじめとする先生方が主役ではないかということで支援しているというスタンスです。基本的な考え方として、開発途上国と日本の市民との架け橋としての JICA の責務、社会的な責務ということですが、JICA というのは途上国に対する技術協力を実施する機関でその活動の中で関係する人々の経験や知見を蓄積しているそういったことを日本の社会の方にも還元していく必要があるのではないかと、それで社会還元という用語を使っていますが、私どもの部署の名前も JICA 社会還元ボランティア支援といいます。JICA による日本社会への還元ですね、こういったものが近年より重要になっているという認識があります。JICA がやっている社会還元事業ですが、主に 2 つのポイントで行っています。日本社会への開発途上国の知見の還元、市民が実質的に何ができるかを考える機会を提供するという 2 点で進めています。具体的なプログラムは知見の還元で主なものを上げますと、まず国際協力出前講座があります。これは右上の写真、主に青年海外協力隊の経験者の方を主に学校で、学校以外に公民等でもあるんですが、ほとんどの場合学校に協力隊の経験者を派遣して途上国の話をしたり、自分たちの経験について語っていただいたりして、日本の子どもたちに途上国の話しをしてもらう、それから日本と途上国との関わりについて考えてもらうそういったことをやってもらうプログラムになります。これは皆様方にも関わってくることなんですけれども、年間に全国で 2 千件ほど 20 万人ぐらい受けていただいて、非常に大規模な教育プランなんですけど、こういった分野で御活躍いただくことがあるかと思います。JICA としても期待しているということです。これについて関連のビデオ CD がございますのでちょっとごらんいただきたいと思います。出てくる方は皆様方と同じように現職の教員で協力隊に参加されてモンゴルに行かれて帰ってきて、それでこの国際協力出前講座を実施していただいたということになりますので、ちょっとイメージを持っていただけるかなと思います。

ビデオの視聴

いかがだったでしょうか。今の方のように皆様方もそれぞれの任地に行って貴重な経験をなさると思いますので、ぜひその貴重な経験を 2 年後に日本の子どもたちに対して伝えていっていただきたいなと思います。

続いていきたいと思いますが、他のプログラムとしては施設訪問の受け入れ、例えば私が所属しております JICA 地球ひろば、渋谷区広尾にありますけど、2・3 の写真ですが日本の市民の皆様にも途上国のことをいろいろ紹介していくことをしています。それから 3 番として開発教育の内容を教材として作成しております。JICA のほうでも若干教材を作っているものがありまして、下の方の写真ですね、アニメーションで JICA のホームページ上で見れますけれどもぼくら地球調査隊というアニメーションも作っております。1 番は学校の壁新聞なんですけどこれまでにいろんな問題、砂漠化の問題とか JICA の方で作成して学校に派遣というのがございます。左下の写真、といいまして開発途上国のいろんな景色を情景を写した写真を貸し出してあります。こういったものを使って授業等を行っていただくという

ことですね。期間勉強することなんですが、中学校・高校でエッセイコンテストを行っています。前回 2006 年度、全国で中高あわせて 4 万 4 千人以上の方が参加してくれたんですが、皆様方また学校に戻ったら学校の方で参加していただくとか、御検討いただければと思います。国際協力実体験プログラムというのですが、これは JICA の国内機関 18 箇所で生徒さんを対象に行っています。それから教師海外研修というのがありまして、百聞は一見にしかずということで約 10 日間先生方に途上国の状況を体験していただいてそれを日本に帰ってきて、授業に生かしていただく、事業の成果は JICA のホームページを通じてシェアしていただくということをやっています。皆さんは参加できませんが同僚の先生方に紹介してほしいと思います。最後に開発教育指導者研修というのがありまして、これは途上国へ行くということではないんですが、開発教育についてのセミナーを NGO・教育委員会と連携して行うということをやっております。この後参加型ワークショップの体験となります。最後に確認として皆様をお願いしたいんですが、2 年後の帰国後、御自分の学校に帰って先ほどのビデオの先生のように経験を生かして地域・学校の開発教育・国際理解教育の中心的な人材として率先して実践をお願いしたいと考えています。協力隊の皆様には一般論として帰国後も御活躍いただきたいというのはあるのですが、その中でも特に現職の教員の皆様については学校の現場に帰っていかれるということですので、特に JICA としてもぜひ御活躍していただきたいというふうに考えています。私たちの課題として皆様方が帰国される 2 年後までに、メーリングリストなど JICA として皆様が活躍されるための情報整理とかサポート体制の更なる整備とか進めていきたいと考えています。それから帰国後同僚の先生に“現職教員特別参加制度”というのがあるよということを、ぜひ途上国へ行っていい活動をしていただいていい意味での語り部という形でまたこの取組を広げていってくださればと思います。【松元 隆】

再び長谷川です。開発教育や国際理解教育のキーワードとして“参加型”という言葉があります。なぜ参加型かといいますと一人じゃ思いつかない考え方やアイデアをみんなと共有することによって新しい考え方やアイデアが生み出されるあるいは自発的にみずから学んで進もうとすることでそれぞれの生きる力というものを高めるといった利点があります。そういった意味でもこういう教育の現場では参加型というものがよく使われます。いくつもある参加型の手法の中で今日はトータルランゲージといったものを皆さんと一緒に体験していただきたいと思います。紹介させていただくのは青年海外協力協会で制作しております“地球生活体験教材”というものです。“ウムヨム村の豚の一生“というワークシートを使っていきたいと思います。グループワークをしていきたいと思いますので、机に座っている皆様は全部で 10 列あるんですが、奇数列の方は後ろを振り返っていただいて 4 人一組、机がない皆さんは移動して構いませんので 4 人、あるいは 5～6 人一組のグループを作ってください。一般の方も是非ご参加ください。

皆さんこんにちは私は青年海外協力隊でタイの北の方のウムヨム村で活動してきた人間

田と申します。私はこの写真のような光景を村でよく見ました。火の中にいるのは何だと思いませんか？豚ですね。皆さんはこの写真を見た瞬間どんな気持ちになりましたか。ワークシートの一冊目の問いかけ、当てはまるものにチェックを入れてその理由を書いてみてください。……。

うれしいと思われた方、手を上げてください。一人、ありがとうございます。かわいそうと思われた、若干多いですね、半分よりは少ないですね。こわい、少ないですね、ありがとうございます。その他、多いですね。そのあたりの気持ち、気になるところなんですが、せっかくなので先ほどグループになっていただいたメンバーで、ちょっと共有してみてください。自分の気持ちとなぜそう思ったのか。……。

せっかく盛り上がってきたところで心苦しいんですけども、協力隊に行かない人の話しもちっと小耳に挟みましたね。丸焼きはジューシー、香ばしそう、もうまるで協力隊だなんて。ちょっと聞いてみたいんですけども、自分の気持ちとその理由をお聞かせしていただければと思います。よろしいですか。

私はその他につけました。すごいと感じたんですけども、日本では豚を焼くとか殺すという行程を人任せにして、私も豚肉は大好きですけども、その行程を人任せにしてしまうんですが、ウムヨム村ではそれを自分たちの手で行っているということがすごいと感じました。自分にはまだそんな技術もないし、できないし、それから周りで見ている方々はその豚がどんどん息絶えて食べ物になっていくのを見ているわけですから、これからそれをいただく時に命をいただくというか、いただきますという気持ちを持つんじゃないかなあ、すごいことだなと思いました。以上です。ありがとうございました。すごいなあって気持ちだってことでしたね。他の皆さんですごいなと思った方はどれくらいいますか。若干少なめですね。はい、ありがとうございます。写真には続きがあります。

2枚目の写真からは豚からのメッセージです。皆さんこんにちは僕はさっき火の中にいた豚です。これから僕が生きていたころの話をするね。僕はウムヨム村のダルマ婆さんの家に生まれたんだ。ダルマ婆さんはラフ族なんだ。僕は生まれて一ヶ月ぐらいまではたくさんの兄弟たちとお母さんのおっぱいを飲んでいたよ。おっぱいを卒業すると大人と同じ食べ物を食べられるようになったんだよ。みんなはどうだったのかな。皆さんはどうでした。この豚さんと一緒ですか。今日もダルマ婆さんが僕の食事を作ってくれているんだ。何を刻んでいるか分かる。大根のように見えるやつですね。大根ではありません、皆さんがよく知っている果物。どなたか分かりますか。はい、バナナの木の子なんですね。これに綿花、トウモロコシ、人間の残飯を加えてくれるからとてもおいしいんだ。野菜くずなどの生ゴミは全部僕が食べるんだよ。僕はこんなふうに食べるんだ。食べ始めると夢中になるね。ところで僕の後ろにダルマ婆さんがいるんだけど、何をしているんだと思う。何をしているんでしょうか。食べる様子を下からのぞく、私もしっかり食べているかどうか見てる。よその家の豚がおいしそうなおいに誘われて盗み食いに来たら、この棒で叩いて追い払ってくれるんだ。実は僕もよその家で叩かれたことがある。ウムヨム村の人た

ちはこの豚はどここの家の豚って見分けることができるんだよ。

キーワードというものがあります。この二つのキーワードで物語を作ってほしいんですけれども。ここから左側 3 列の皆さんには豚の恋というキーワードで、先ほどのグループでお話をつくってください。こちら側 2 列と後ろ側に座っているグループの皆さんは豚の喧嘩というキーワードでグループで 1 つお話をつくってください。時間は 3 分くらい。

はい、ありがとうございます。豚の恋から発表したいという人いますか。あの一こうシヤイだと任国行ってから困りますよ。じゃあ、名指ししちゃいますよ、こちらから。先ほど盛り上がっていた男性グループから行きましょう。・・・で恋はないんじゃないかと悲しい結論になりました。

豚の喧嘩のグループでどなたか発表してくださいませんか。すばらしい、お願いします。3 匹居ますので、(ここにエサがあります)、兄さんそんなに食べないでよ。そろそろ僕にも食べさせてよ。うるせえ、俺が食べ終わってから。が一と取り合いになります。あの映像を。兄さん、でも末っ子にも食べさせてやらないと、兄さんなんだろう。兄さんもうあっち行ってよ。そんなに喧嘩するんじゃないよ。終わりです。拍手。わずか 3 分の間にここまで話しを作る、素晴らしいですね。ありがとうございました。本当は時間があれば、各グループの話を聞いてみたいんですが、先に進ませていただきます。

そんなふうにも暮らしていたある日、他の家の男の人たちが僕のほうをちらちら見ながら、何か相談しているんだよ。僕はなんかいやな予感がした。男たちが僕の足に縄をかけた。ウギャーウギャー、とにかく叫んだ。でも足や体を押さえられて身動きできないようにされた。それから男たちは僕の喉元から心臓にかけて大きなナイフを突き刺した。気が付くと僕は高いところにいて、魂の抜けた自分と俺を取り囲む男たちを見ていたんだ。あつ、僕は死んだんだ。肉を切り分けるのが男の人たちの役目で、女の人たちは料理をする。これから儀式が始まるらしい。念仏を唱え始めると、山の神がやってきて、僕の肉を食べ始める。あれっ、ダルマ婆さんの魂も戻ってきた。その時僕は分かった。この儀式は婆さんの病気を治すためのものだったんだって。僕のおいしい肉に誘われて、神様が婆さんの魂を連れ戻してくれたんだ。もう直ぐ病気も治る。儀式が終わった後、村のみんなが僕の料理を食べたんだ。すごい勢いで食べていた。僕はあつという間にみんなの胃袋の中だ。僕の尻尾をしゃぶっている子もいたよ。僕のつま先まで食べるんだ。僕はダルマ婆さんのために生まれたんだ。そうそう、ところで僕の頭はどうなったと思う。どうなったと思います、頭は。ダルマ婆さんの家に飾ってあるんだよ。僕やこの儀式のことをずっと忘れないためにね。それと今自分が生きていることへの感謝の印なんだって。僕はこうやってウムヨム村の中で行き続けるんだ。みんなは僕の話聞いてどんなことを感じたかな。

1 枚目の写真、最初に見た写真なんですけれども、最初に見た感じと今 2 回目に見た気持ち、一緒ですか。一緒です、違います、同じですという方いると思います。違いますという方いらっしゃると思います。ちょっと、どういう気持ちからどういう気持ちになったか、聞いてみたいんですけれども。

先ほどは、自分がこの豚を育てるとしたら、絶対情が移らないように、この子はいずれ食べ物になると愛情をかけずに育てなくっちゃと思っていましたが、先ほどの最後の、頭を飾っているという話を聞いて、そうなったらじゃあやはり愛情をかけて、その子とともにずっと生きていくという覚悟で育てるというのもありだなと思いました。

ありがとうございました。最後の写真なんですが、**人間田**さんからのメッセージがあります。あたしは最初この光景を見た時、豚の叫び声を聞いて目をそらしてしまいました。でも村の人たちと豚のつながりを目にするうちに少しずつ気持ちが変わっていきました。大切に育てた豚の最後をしっかりと見ようと思いました。そして地も肉も全部残さず食べようと思うようになりました。おかげで私は 2 年間、病気もせずに、元気に過ごすことができました。いろいろな生と死の大きな流れの中で今自分が生きているんだなと感じています。というメッセージで教材の方は終わるんですが、ワークシートの 2 つ目の問いかけ、メッセージを聞いて皆さんは命についてどんな感じを持っていますか。何を感じていますかということで、本来であればここで時間をとって、ワークシートにきちんと書いていただいて、また共有という形になるんですけども、今日はあいにく時間がないので、この後の話はおそらく訓練中にいくつか講座が組まれているんですが、我々とはお目にかかることがあると思いますので、その時にお話の続きやまた違う教材を紹介させていただければと思います。この教材を含めてチラシの方には 6 教材あるんですが、全て青年海外協力隊の OB・OG の体験を基に作成しているものです。学校現場で使えるものとして 45 分という時間で作っています。もしかすると皆さんの体験そのものが一つの教材となる可能性もありますので、その時に使えるような写真の撮り方とか、具体物の見せ方について訓練所の講座の中で少しずつお話していければなと思います。ではこれで終わりたいと思います。【長谷川雅之】

2007 年 4 月 2 日

拠点システム構築事業「国際教育協力イニシアチブ」

平成 19 年度 青年海外協力隊 現職教員特別研修

青年海外協力隊派遣現職教員（体育分野）サポート事業配布資料

（社）青年海外協力協会

＜平成 18 年度課題実施内容＞

・ニーズ調査

隊員はどのようなサポートが必要か調査するために、以下の通り実施した。

1. 体育分野におけるこれまでの隊員の派遣状況及び、現職教員の派遣状況調査
2. 平成 14 年度及び 15 年度派遣現職教員(体育)の隊員活動報告書(14 名分)の分析及び、平成 10 年度以降に派遣された体育・スポーツ分野の隊員 807 名(回答数:240 名)を対象にしたアンケート調査
3. 活動中の隊員のニーズ把握、活動における問題点の抽出、来年度以降の支援内容の明確化
4. 帰国派遣現職教員を対象とした E メールによる自由記述式のアンケート調査(3 名)
5. 体育隊員の帰国時にヒアリング調査、活動現場及び帰国後のニーズ把握

・支援体制構築

隊員の支援要請に対応できるよう、以下の通り支援体制を構築した。

1. 青年海外協力隊 OB 会組織である「体育・スポーツ帰国隊員の会」と連携をとり、現職教員からの相談やサポート要請に対応可能な体制を構築
2. 応募希望者への応募相談等に対応可能な体制を構築
3. 体育・スポーツ分野応募希望者に対して募集説明会を開催
4. 国際協力機構(JICA)の体育技術顧問を含んだサポート体制を構築
5. 体育隊員の帰国時に面談等を実施、それに伴う支援ネットワークの充実
6. JICA の協力・許可を得て、隊員帰国時に行う帰国時オリエンテーションにて該当隊員に協力を依頼し、連絡体制を構築。

* 当該隊員を介して派遣中隊員との連絡体制を構築し、隊員活動の支障とならない範囲での連携を確立した。

・現地調査

ニーズ調査により、派遣前に任国における体育事情の情報供与が必要な事が判明した。それを受けてザンビア・マラウイ体育の現地調査を実施した。現地では該当国の体育事情調査、隊員の活動風景撮影、体育関係者とのネットワーク構築を図った。

・派遣中隊員へのサポート

1. E メールで日本の運動会、組体操に関する資料や映像が必要との要請があり、収集した資料、映像を E メール(添付ファイル)により提供。

現職派遣隊員 OB より顕微鏡を元派遣国に寄付したいとの要望があり、その手段として「世界の笑顔のために」の案内を実施。

＜平成 19 年度実施計画の概要＞

平成 19 年度は、体育隊員のみならず、スポーツ隊員、小学校教諭隊員等にもサポート対象を拡大していく事を検討している。

1. 派遣前のサポート

隊員の派遣前には以下の通り、サポートを実施する。

- ① 応募に際する現職教員からの相談対応
- ② 派遣前訓練開始直前に現職教員に対するオリエンテーションの実施

2. 派遣中のサポート

隊員の派遣中には以下の通りサポートを実施する。

- ① 途上国の教育制度、指導要領、教科書、教材、等の資料収集
- ② JICA 技術顧問と連携してのサポート
- ③ 体育の技術的な照会以外の体育の活動に関わる相談
- ④ 現職体育隊員の派遣国訪問
- ⑤ 帰国間際における社会復帰のための心構え、気持ちの切り替えに関する相談

3. 帰国後のサポート

- ① 帰国時オリエンテーションの実施
- ② 帰国後、現地で作成・収集した教材等資料の収集、e-支援システムのアーカイブへ格納
- ③ 社会復帰に関する相談
- ④ 国際理解教育のサポート

2005年10月1日現在
青年海外協力隊事務局

	体育 教育	体育医学	エアロビクス	陸上競技	スキー	体操競技	新体操	水泳	シンクロ	水球	テニス	卓球	バドミントン	パレーボール	バスケットボール	ソフトボール	野球	ハンドボール	サッカー	ラグビー	ボクシング	アーチェリー	柔道	空手道	合気道	剣道	相撲	重量挙げ	自転車競技	合計
Aアジア	バンラデシュ	21				4	1	5			3	3	2					7	6		1			5	3					61
	ブータン	31										5																		37
	カンボジア	7						4			1	4		1										5						22
	中華人民共和国	1		2		1		8									8		1			2		5						28
	インド					4						1																		5
	インドネシア	1						4	2	3						6						3		15		4				38
	ラオス	6		2											10									8	2					27
	マレーシア	28	2	1		5	2	10	1			2		2	5						9		1	38				1		90
	モルジブ	21		9		1		4			3	12	6	11	4															71
	モンゴル	1	1			2					3	1	3	11	2			1						3	3	3				34
	ナパール	27		2		9								1	5									7	8					59
	パキスタン													2																2
	フィリピン	3		2		6	1	7				1		B			3					4		17						2
	スリランカ	14		5		2		3					3	24	2		2		6	2				4	4			3		55
	タイ	3				2		1																4	4					72
	ベトナム	3				1	1	2	1		6	4	2	4	2									2	2					12
E中近東	エジプト	3		1				1				1		1								1								27
	ヨルダン	6		1		1		7						3	2			1	1					4	1	3				8
	モロッコ	7		1		6		17				6	4	12				1						3	1					30
	スーダン			1																										68
	シリア	24	1	20		9	2	8			5	3	3	9	3			4	5		2	4		10	2					1
	チュニジア	2				4		2				B		23	1									7	5					114
	イエメン	1	1	2								3		1																52
Fアフリカ	ボツワナ	7														1							1							9
	ブルンジ	1																												8
	ジブチ																													

体育隊員派遣実績(国別・身分措置別)

2006年 11月1日現在

国名/身分措置	無職	退職	派遣法	有給	無給	職専免	未設定	計
1 イエメン	0	0	0	0	0	0	1	1
2 インドネシア	0	1	0	0	0	0	0	1
3 ウガンダ	1	0	0	0	0	0	0	1
4 エクアドル	10	3	3	0	0	0	1	17
5 エジプト	2	1	0	0	0	0	0	3
6 エチオピア	1	1	0	1	0	0	1	4
7 エルサルバドル	7	9	3	3	0	0	0	22
8 カンボジア	2	4	3	0	0	0	0	9
9 キルギス	3	0	0	0	0	0	0	3
10 グアテマラ	2	0	3	0	0	0	0	5
11 ケニア	0	0	0	1	0	0	2	3
12 コスタリカ	1	0	0	0	0	0	3	4
13 コロンビア	3	0	0	0	0	0	2	5
14 サモア	1	1	1	0	0	0	0	3
15 ザンビア	4	1	2	1	0	0	3	11
16 ジャマイカ	0	0	0	0	0	0	1	1
17 シリア	11	8	5	0	0	0	4	28
18 ジンバブエ	29	18	3	0	0	0	9	59
19 スリランカ	3	2	2	0	1	0	6	14
20 セネガル	2	0	0	0	0	0	0	2
21 セントビンセント	0	0	1	0	0	0	0	1
22 セントルシア	5	0	1	0	0	0	0	6
23 ソロモン	11	4	5	0	0	0	8	28
24 タイ	0	1	0	0	0	0	2	3
25 タンザニア	1	1	0	0	0	0	1	3
26 チュニジア	1	1	0	0	0	0	1	3
27 チリ	2	3	0	0	0	0	0	5
28 ドミニカ共和国	6	3	0	0	0	0	2	11
29 トンガ	6	5	0	0	0	0	0	11
30 ニカラグア	5	2	1	0	0	0	0	8
31 ニジェール	14	3	3	0	0	0	1	21
32 ネパール	6	2	4	1	0	0	14	27
33 パナマ	1	0	0	0	0	0	0	1
34 パヌアツ	7	3	3	0	0	0	0	13
35 パプアニューギニア	13	3	3	0	0	0	10	29
36 パラオ	3	0	1	0	0	0	0	4
37 パラグアイ	10	9	9	3	1	0	17	49
38 ハンガリー	5	2	0	0	0	0	0	7
39 バングラデシュ	6	7	7	0	0	0	3	23
40 フィリピン	1	0	0	0	0	0	2	3
41 ブータン	21	6	5	0	0	0	1	33
42 ブルガリア	0	0	0	0	0	0	1	1
43 ブルンジ	0	0	0	0	0	0	1	1
44 ベナン	1	0	0	0	0	0	0	1
45 ベリーズ	2	2	0	0	0	0	0	4
46 ベルー	0	0	2	1	0	1	7	11
47 ポーランド	8	0	1	0	0	0	0	9
48 ボツワナ	6	0	1	0	0	0	0	7
49 ボリビア	4	4	1	0	0	0	0	9
50 ホンジュラス	3	6	2	0	0	0	11	22
51 マーシャル	4	1	0	0	0	0	0	5
52 マダガスカル	1	0	0	0	0	0	0	1
53 マラウイ	3	2	0	0	0	0	0	5
54 マレーシア	5	1	0	4	0	1	17	28
55 ミクロネシア	1	0	0	0	0	0	2	3
56 メキシコ	1	0	0	1	0	0	0	2
57 モザンビーク	2	1	0	0	0	0	0	3
58 モルディブ	10	6	3	2	0	0	2	23
59 モロッコ	1	0	0	1	0	0	5	7
60 モンゴル	2	0	0	0	0	0	0	2
61 ヨルダン	2	2	0	1	0	0	1	6
62 ラオス	1	0	1	2	0	0	1	5
63 ルーマニア	2	0	0	0	0	0	0	2
64 ルワンダ	2	1	0	0	0	0	5	8
65 中華人民共和国	1	0	0	0	0	0	0	1
計	268	130	79	22	2	2	148	651

体育・スポーツ帰国隊員を対象とした意識調査

この調査は、皆様が青年海外協力隊に参加していた当時に感じていたことや思っていたことを調べようとするものです。隊員時代を回想することになりますが、あまり深く考えず、ご自身の感覚でお答えください。この調査票は、両面印刷になっておりますので、記入漏れがないよう、全ての質問にお答えください。

隊次() 国名() 職種()
 性別() 氏名() 赴任された当時の年齢()才
 赴任前までの指導経験の年数()年 現在のご職業()

I. 隊員時代、1～20の項目に書かれている内容について、活動の障害と感じ、悩んだことはどの程度ありましたか？

	全く なかつた	か ほ と ん ど な	一 時 期 あ つ た	頻 繁 に あ つ た
1 専門分野に関する語学力が足りなかったこと	1	2	3	4
2 任国には、日本と異なる独自の指導方法があったこと	1	2	3	4
3 配属先の上司と信頼関係が築けなかったこと	1	2	3	4
4 語学力不足で、教え子に伝えたいことを上手く伝えられなかったこと	1	2	3	4
5 語学力不足で、配属先の同僚に伝えたいことを上手く伝えられなかったこと	1	2	3	4
6 限られた用具・器具で指導しなければならなかったこと	1	2	3	4
7 任国において、他の協力隊員との関係が上手くいかなかったこと	1	2	3	4
8 配属先の同僚と信頼関係が築けなかったこと	1	2	3	4
9 語学力不足で、配属先の上司に伝えたいことを上手く伝えられなかったこと	1	2	3	4
10 日本にいる家族、恋人、友人との関係が上手くいかなかったこと	1	2	3	4
11 語学力不足で、配属先の同僚の言うことがよく理解できなかったこと	1	2	3	4
12 JICA関係者との関係が上手くいかなかったこと	1	2	3	4
13 任国の体育・スポーツ事情をよく知らないまま、指導しなければならなかったこと	1	2	3	4
14 教え子と信頼関係が築けなかったこと	1	2	3	4
15 教え子の体育・スポーツに対する考え方が日本の児童生徒とは異なっていたこと	1	2	3	4
16 語学力不足で、配属先の上司の言うことがよく理解できなかったこと	1	2	3	4
17 配属先の同僚と自分の体育・スポーツに対する考え方が違ったこと	1	2	3	4
18 指導の際、ネタ不足で練習メニューがマンネリ化してしまったこと	1	2	3	4
19 配属先の上司と自分の体育・スポーツに対する考え方が違ったこと	1	2	3	4
20 語学力不足で、教え子たちの言うことがよく理解できなかったこと	1	2	3	4

II. 協力隊参加前と参加後のご自身を比較し、評価してください。

	全 く な い	ま あ ま り な い 当 て は ま	ま す こ し 当 て は ま	よ く 当 て は ま
1 参加前よりも、自分の気持ちや考えを人に伝えることが上手になった	1	2	3	4
2 参加前よりも、日本の良い点や悪い点がみえるようになった	1	2	3	4
3 参加前よりも、困難に直面したときの対処能力が向上した	1	2	3	4
4 参加前よりも、異文化に対する理解が深まった	1	2	3	4
5 参加前よりも、人の話を聞くことや理解することが上手になった	1	2	3	4

引き続き、裏面の回答をよろしくお願いします。

Ⅲ. 隊員だった当時、もし、青年海外協力協会や体育・スポーツ帰国隊員の会のような組織によって、派遣前、あるいは、派遣中の隊員活動を支援する体制がつくられていたとしたら、1～15の項目に書かれているような支援をどの程度必要とされましたか。当時をよく思い出して回答してください。

	全く必要なかった	どちらかと言えば必要なかった	どちらかと言えば必要だった	すごく必要だった
1 専門分野の語学に関する情報提供	1	2	3	4
2 現地語で作成された教材の提供	1	2	3	4
3 任国における体育・スポーツ事情の情報提供	1	2	3	4
4 用具・器具の提供	1	2	3	4
5 専門書の提供（任国では入手不可能なもの）	1	2	3	4
6 先輩隊員や訓練所職員など、関係者による経験・教訓等の提示	1	2	3	4
7 体育・スポーツ分野の専門家の紹介	1	2	3	4
8 任国まで来て、指導補助をしてくれる協力者	1	2	3	4
9 日本からの寄付があった場合の輸送費の補助	1	2	3	4
10 配属先の施設・設備の修理費用の補助	1	2	3	4
11 日本の学校やスポーツ団体との交流時におけるサポート	1	2	3	4
12 他国の体育・スポーツ隊員と情報交換をするためのネットワークづくり	1	2	3	4
13 任国への国際協力（体育・スポーツ分野）の実績についての情報提供	1	2	3	4
14 任国の学生や児童生徒たちの運動能力レベルに関する情報提供	1	2	3	4
15 任国における教育事情の情報提供	1	2	3	4

Ⅳ. 以下の質問にお答えください（当てはまるものに○印をつけてください）。

1. 協力隊参加時の身分をお答えください。

1. 現職

2. 退職・無職

3. 学生

2. 隊員時代の活動形態はどのようなものでしたか？

1. 教室型（配属先のみ）

2. 巡回型

3. 教室・巡回の両方

3. 現在も、任国の言語で作成された教材等をお持ちですか？

1. 持っている

2. 持っていない

3. 隊員報告書に添付した

4. 赴任されていた当時、任国では、政府によって作成された体育科の学習指導要領はありましたか？

1. あった

2. なかった

3. 把握していない

5. 赴任されていた当時、任地では、インターネット接続は可能でしたか？

1. 可能だった

2. 不可能だった

6. 今後、このようなアンケート調査がある場合には、Eメールでご回答頂きたいと考えております。そのような場合、再度、ご協力を頂くことは可能でしょうか？もし、可能な場合には、Eメールアドレスのご記入をよろしくお願いします。

1. 可能

2. 不可能

3. 郵送のみなら可能

Eメールアドレス→(

)

お忙しい中、ご協力ありがとうございました。今後とも、よろしくお願いします。

帰国された現職派遣教員を対象にした記述式アンケート調査の内容

- 質問 1. 隊員活動を行っていく上で、派遣前や派遣中に必要としていた支援があれば挙げて下さい。もし、必要としていた支援があったならば、その支援を必要としていた理由も挙げて下さい。
- 質問 2. 昨年のアンケート調査より、派遣現職教員への有効な支援策は、「語学支援」と「任国における体育事情の情報提供」であろうという結論になりました。今後は、これらの支援体制を構築していく予定ですが、このことについて、何かご意見、ご提案などがあれば挙げて下さい。
- 質問 3. 隊員活動を行っていく上で、障害になったこと、悩んだことなど、苦労したことがあれば挙げて下さい。もし、あった場合は、そのことに対してどのように向き合っていたのかという対処法を挙げて下さい。
- 質問 4. 協力隊参加前と現在を比べて、異文化に対する理解に何か変化したことがあれば挙げて下さい。
- 質問 5. 今後、任国での教育経験を日本でどのように還元していくのかを挙げて下さい。既に、還元中であれば、その内容を挙げて下さい。
- 質問 6. 協力隊参加前と現在を比べて、日本の児童生徒とのコミュニケーションの取り方に何か変化したことがあれば挙げて下さい。
- 質問 7. 協力隊参加前と現在を比べて、日本の教育現場でご自身が問題に直面したときの対処方法に何か変化したことがあれば挙げて下さい。
- 質問 8. 最後に、活動していたときの様子が分かる写真 2～3 枚とその写真についての簡単な説明あるいはコメントを添えてご返信を頂けると幸いです。

以上

スポーツ分野の協力隊員の活動状況
(2006年6月30日現在)

職種名	派遣中	帰国	累計
体育	72	599	671
体育医学	0	4	4
エアロビクス	3	4	7
陸上競技	7	89	96
スキー	0	3	3
体操競技	4	122	126
新体操	0	9	9
水泳	10	161	171
シンクロ	0	5	5
水球	0	3	3
テニス	6	23	29
卓球	11	82	93
バドミントン	1	30	31
バレーボール	16	200	216
バスケットボール	8	51	59
ソフトボール	2	41	43
野球	14	131	145
ハンドボール	3	17	20
サッカー	2	30	32
ラグビー	0	2	2
ボクシング	0	6	6
レスリング	0	15	15
アーチェリー	0	1	1
柔道	19	290	309
空手道	6	75	81
合気道	3	33	36
剣道	5	19	24
相撲	1	0	1
重量あげ	0	10	10
自転車競技	1	0	1
合計	194	2055	2249

派遣法による現職参加(年度別性別)

年度	女	男	計
61	0	3	3
62	1	2	3
63	1	2	3
1	0	1	1
2	0	2	2
4	3	0	3
5	5	1	6
6	3	4	7
7	2	1	3
8	2	1	3
9	4	2	6
10	7	1	8
11	2	0	2
12	1	2	3
13	1	2	3
14	5	6	11
15	1	3	4
17	2	1	3
18	2	3	5
計	42	37	79

派遣法による現職参加(国別年度別)

国名/年度	61	62	63	1	2	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	17	18	計
エクアドル						1										2				3
エルサルバドル								1								1			1	3
カンボジア											1					1			1	3
グアテマラ											2		1							3
サモア						1														1
ザンビア	1		1																	2
シリア										1		2							2	5
ジンバブエ								1		1		1								3
スリランカ			1													1				2
セントビンセント																		1		1
セントルシア												1								1
ソロモン				1			2					2								5
ニカラグア													1							1
ニジェール								1								1		1		3
ネパール		1	1					1			1									4
バヌアツ								1						1					1	3
パプアニューギニア		1					1										1			3
パラオ															1					1
パラグアイ		1			2	1	1		2			1				1				9
バングラデシュ							1		1		1			1	1	1	1			7
ブータン							1			1	1	1		1						5
ペルー	2																			2
ポーランド																1				1
ボツワナ																	1			1
ボリビア								1												1
ホンジュラス								1								1				2
モルディブ																1	1	1		3
ラオス															1					1
計	3	3	3	1	2	3	6	7	3	3	6	8	2	3	3	11	4	3	5	79

「国際協力イニシアチブ」
青年海外協力隊派遣現職教員＜体育＞
サポート平成18年度実施報告

(社) 青年海外協力協会
川口 純

1

平成18年度課題実施課題・内容

課題一協力隊派遣現職教員(体育)のサポート

↓
国際教育協力の質の向上

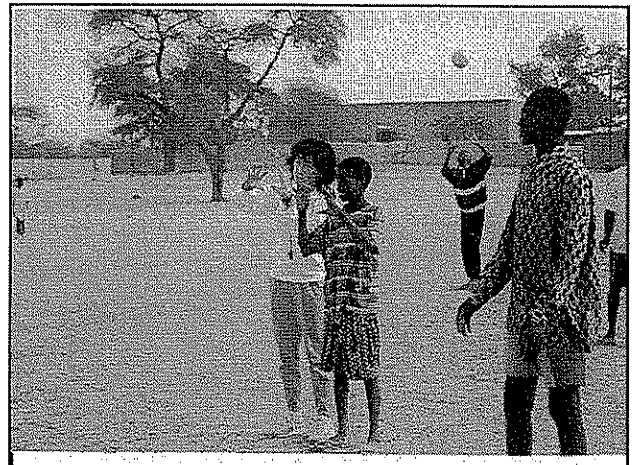
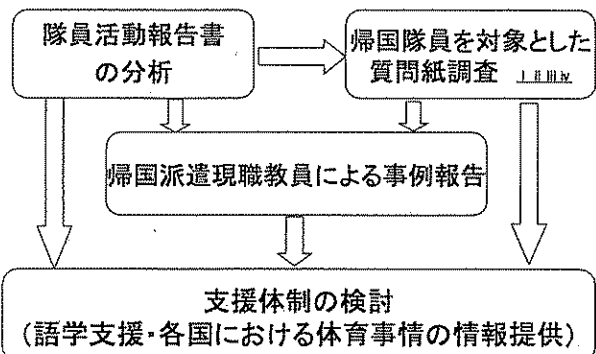
実施内容

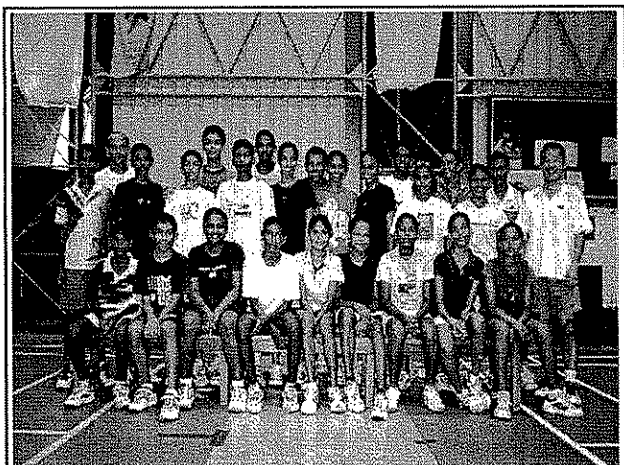
- ニーズ調査
- 支援体制の構築
- 現地調査(ザンビア・マラウイ)

2



支援体制構築までのプロセス

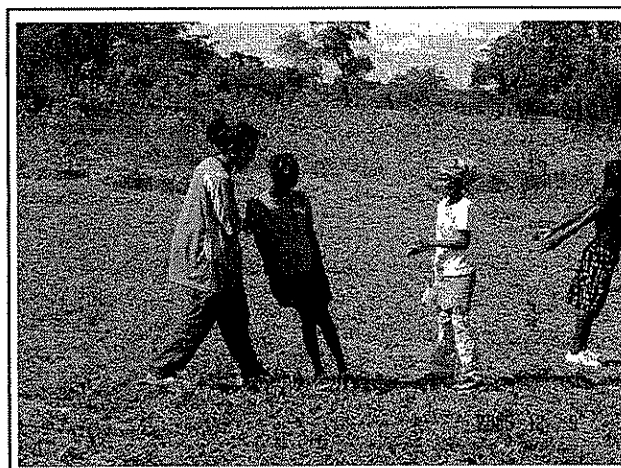




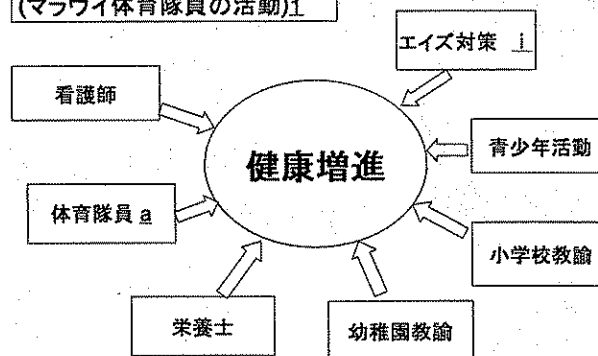
現地調査(ザンビア・マラウイ)

- 体育概要調査
- 体育関係者とのネットワーク構築
- 活動風景撮影

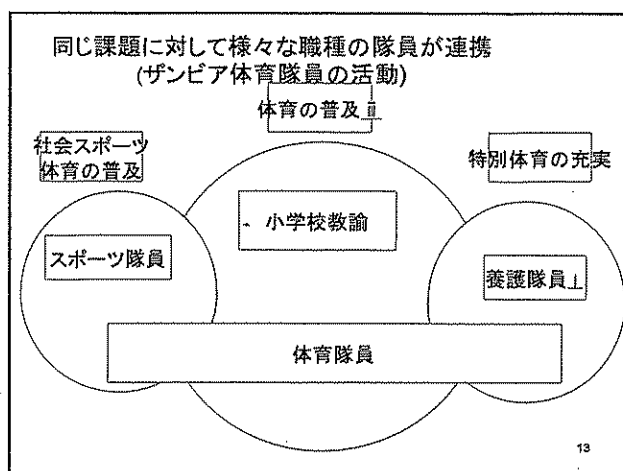
9



同じ課題に対して様々な職種の隊員が連携
(マラウイ体育隊員の活動)¹



12



活動中の隊員に対するサポート

- メールにて対応
- 「世界の笑顔のために」活用

14



平成19年度の支援計画

- <派遣前>
 - ・応募相談 1
 - ・任国の体育事情調査
 - ・オリエンテーションの実施
- <派遣中>
 - ・支援要請に対応
 - ・現地調査
 - ・資料収集
- <帰国後>
 - ・オリエンテーションの実施
 - ・国際理解教育に対するサポート

15









【キーワード】

• ブタの
恋

• ブタの
けんか





